



日常の危機

饗庭 孝男

あえば・たかお

1930年、滋賀県生まれ。フランス文学者。

著書に、『石と光の思想』（勤草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽の友社）、『西欧と愛』（小沢書房）、『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

（一）

1月17日の早朝、私は神戸の三の宮ターミナルホテルの十階に泊っていて、大地震に見まわれた。私は勤務校のある東灘区の山手の甲南女子大学の文学部に週一回、新幹線でかよっていたからである。それは地の底から突き上げてきた轟音とともに始まり、激しい上下動とつづいてきた水平動のため、あらゆるものが吹き飛び、私も二、三回ベッドの上からぼうりあげられ、あやうくガラスの破片の飛び散る床に落ちそうになった。

咄嗟のことで私は左腕で頭をかばったのであろう。その瞬間はよく覚えていないが、手首に飛んできたガラスがささり、ひじが切れてしまった。まだ早朝の闇だったから状況は全くわからなかった。二日後、横浜へ戻ってからやっとガラスを抜いたが、その傷だけではなく、左腕がところどころ鈍い痛みがのこっているのを見ると、何か重いものもいくつか当たらしい。病院へ行ってもこの程度では診てもらえそうにないと考えて帰ってきたのである。実際、野戦病院と化したあちこちの病院では次々と運ばれてくる重傷者が、水が出ない上に医者が足らず、手術も不可能で空しく命を落としたときく。また怪我人を車で大阪へ運んだケースも多いが、交通規制がなかったため、一般車にまじり、十時間以上もかかり、ここでも絶命した患者たちがいた。

その上ヘリコプターの搬送はやっと十日近く経ってから思いついたというから、すべてが手遅れであった。私は震災の翌日、朝の十時頃、知り合った人の世話で神戸を脱出し、車で六甲のトンネルをくぐって福知山へ出、汽車で京都経由、横浜へ戻ったのである。神戸を出てゆく時、この町に入る反対車線はおそろしい渋滞であったが、その中で救援に向う自衛隊のトラックが50台ほど、一般車にはさまれて難渋しているのを見、非常時における交通規制がないと、いかに大きな混乱と犠牲をもたらすかを肌身で知ったものであった。

（二）

今更、政府を責めても仕方がないが、首相は事態の重要性を認識せずに、18日もホテルで震災と関係のない朝食会を

ひらき、やがて死者の数の増大におどろいて本気になったという。さらに官房長官もテレビで知ったというから、いかに両者の責任の無自覚さがわかるというものであろう。それを「最善の策」とは、よくも言ったものである。その間に数千人が死んで行ったのである。また自衛隊の初動がおそかったとマスコミは言う。自衛隊アレルギーがあったのではないか、という質問に官房長官は「つゆ程もない」と答えているが果してそうであろうか。その二日前の15日、社会党と自治労は沖縄で自衛隊成人式反対運動をしている（しかしその党首は被災地の視察に自衛隊のヘリコプターで来ている）。また昨年度の予算編成であれほど自衛隊の予算を削るために奮闘したのも社会党であった。アレルギーが「つゆ程もない」とは強弁にすぎない。

しかも兵庫県知事が出動要請をしたのは午前十時になってからである。神戸市は自衛隊と積極的な防災訓練をしたことはただの一度もなかった。自衛隊が活断層の危険もふくめ、広域的な防災のシミュレーションの膨大な資料を京阪地方にくばったのにたいして、何の返答もしなかったのも神戸市である。自衛艦の接岸をこぼみ、海上保安庁の船ならばよい、とのべたのも同様である。

私が言いたいことは「平和」が「防衛」の問題や「政治」の問題ではなく、「災害」の問題でもある、という認識が県や神戸市には欠落していたということである。観念的に「平和」を唱え、自衛隊を忌避していたことが、今回の震災で明らかになったということになろう。戦後50年ちかく、殆んど批判政党として終始し、国家の運営に積極的かつ自覚的なヴェイジョンを提出したことのなかった政党に危機管理の発想が「つゆ程も」なかったとしても不思議ではない。それは「平和」が政治のみに用いられ、税金を出して日常の生活の安定と「平和」を求めてきた国民にたいする大きな裏切りと言うことができよう。

（三）

山を削ってその地でポートピアや六甲アイランドをつくり、全国の自治体に都市づくりの妙を見せて悦に入っていた神



‘95.1.17.「燃える神戸」

神戸市が、肝心のライフラインの設備、交通問題の日常のシビアな検討を何一つ行わなかったことを考える時、私は日本の戦後から今日にかけての表層的な文化のシンボルをそこに見るのである。それは片方で「平和」を唱え、他方で目につきやすい「文化」をかざり、いたずらに美術館や文化会館をきそってたてることで満足していた自治体の典型であろう。市民税とは何よりも、生活の基礎を安全かつ堅牢なものにするために用いるものではないのだろうか。自治体が税金で億単位の絵を買って美術館をたてる余裕があるのなら、何よりもまず、ライフラインの徹底的な整備こそ行うべきであっただろう。芸術は役人がお膳立てするのではなく、個人のレヴェルの問題である。

さらに言えば国際交流に力を入れながら、外国の好意あふれる救援を断る思考は、自治体のみならず、国自体の思考がいかに非国際的であるか、いかにその本質において鎖国的であるかを如実に物語っている。国際交流とは、暇と金のあるマダムたちが、外国人を招いて笑顔をうかべながら握手をすることでもなければ、自分勝手に来た留学生に援助の金を大盤振舞することでもない。大切なことは柔軟で相対的な思考とリアリズムがともに働くことではなかろうか。

(四)

しかし振り返って考えれば、今日におけるデパートでの防災グッズの俄な売れ行きは、いかに市民が平常の「危機」の個人管理がおそまつなものであったかを同時に物語っている。私のヨーロッパ留学や滞在中の経験のなかで印象的であったのは、地方と言わず、パリと言わず、個人の家の地下室に、いつも数カ月を耐えることができる食料や水の備蓄があるという点であった。招かれた家で、まず見せてくれる場所は、じやがいも、たまねぎ、ソーセージ、水、ワイン等々のおびただしい

備蓄が整然とおかれた地下室であった。

かつて1968年のパリの「五月革命」の一ケ月中、市民がゼネストであらゆる物資が不足しているにもかかわらず、それに耐えたのは、この備蓄のためである。ヨーロッパの長い歴史をとおり、たとえばオランダ、ベルギー、北フランスでは、朝、窓のカーテンを開くとドイツ軍の戦車が走ってくるのを見ているという状況が、こうした備蓄をもつという日常のリアリズムをつくり出しているのである。私はこれを「陸つづきの思考」と呼んでいる。

日本はまわりが海であり、陸で国境を他国と接するということがない。そこでは上記の思考のリアリズムが働かず、「平和」の御題目を唱えていれば「平和」である、という錯覚が理想のようになってきた。しかも他の国には幻想をもって接したのである。たとえばソビエト社会主義に変わることはない幻想を抱いていた進歩的文化人と社会党と多くのマスコミを見ればよい。冷戦構造の解体後も、彼らは依然として、錯覚としての「平和」を唱えているのである。したがって「陸つづきの思考」のリアリズムは、市民のレヴェルまで無縁なものとなり、表層文化の上に生きてきた。自分のところだけは「地震」が来ないという何らあてにならぬ確信と、日本だけは「平和」である、という「一国平和主義」は表裏一体であったのだ。これは認識ではなく「信仰」と呼ぶべきものであり、知らず知らずに一種の鎖国主義(たとえば他国の救援をこたわるような)に陥っていたと言ってもよい。

日本は「ふつうの国」となるべきであり、かつまた日常はいつも「危機」をはらんでいると知るべきであろう。今回の震災は、はしなくも、また不幸にも、ただ「危機管理」の技術的な欠如をあらわにしたのみならず、戦後思考にある「幻想」もしくは「錯覚」としての「平和」を問い直す大きな契機をつくったのである。

※写真提供:朝日新聞社